審査の結果の要旨

氏名 田嶋　一

本研究は、日本社会が近世から近代に移行する過程における青少年の自己形成史を＜少年＞と＜青年＞の領域で発生した問題を手がかりとして、社会史的な問題関心の下に描き出そうとしたものである。

本研究は、三部構成、序章を含めて全十一章で構成されている。序章「近代日本における＜教育＞と＜青年＞の概念」では、日本の近代に「教育」の概念が登場した経緯と、青年の概念が登場した経緯を考察し、本書における中心的な分析概念となる＜教育＞・＜教化＞・＜形成＞についての定義を行っている。

序章を踏まえて、第一部「＜一人前＞に向けて－近世共同体社会の人間形成」では、近世社会における「しつけ」を＜形成＞という概念によって読み解き、共同体社会の養育システムの全体像に迫っている。まず第一章「民衆の子育ての習俗とその思想」では、近世社会における子育ての文化や習俗を、外国人の見聞録をはじめとする様々な史料を駆使して読み解いている。第二章「近世社会の家族と子育て」では、近世後期に出現した身分社会の枠組みを超えた新しい養育論の成立と展開、さらにはそれを生みだした近代家族の萌芽について検討された。第三章「若者の形成と若者組」では、近世社会の若者組の特質について論じている。

第二部「＜若者＞と＜青年＞の社会史－近世から近代へ」では、第一部の検討を受けて、近代社会への移行期に「訓育システム」がどのように変化することになったかを検討している。第一章「共同体の解体と＜青年＞の出現」では、「青年」の幕末維新期における登場とその後について検討が行われた。第二章「＜青年＞の社会史－山本滝之助の場合」では、青年団運動の父とされる山本の履歴を具体的事例として「青年」の自己形成史を検討している。第三章「＜修養＞の成立と展開」では、日本の青年の自己形成史上の鍵概念として「修養」に着目し、この概念の成立とその変容過程について論じている。さらに第四章「＜修養＞の大衆化－野間清治と講談社の出版事業」では、野間の履歴に即して、修養が大衆化し、self-discipline としての性格を強めていく過程を明らかにしている。

第三部「近代化の進行と教育文化」は、「少年」と「児童」の概念の登場について検討している。第一章「＜少年＞概念の成立と少年期の出現－雑誌『少年世界』の分析を通して」では、「青年」の登場により少年概念が再編される過程を具体的に検討している。第二章「1920－30 年代における児童文化論・児童文化運動の展開」では、少年概念の成立後に新たに登場する児童概念と児童文化論の展開を検討した。第三章「青少年の自己形成と学校文化」では、青年期前期の「青少年」が学校文化の中でどのように自己形成と自立の課題に直面することになったのかを 1940 年代にまで射程を伸ばして検討した。

以上のように本研究は、「少年」と「青年」の自己形成の社会史を、前近代との比較の下に描き出そうとする壮大な研究であり、近年の「青年」のメディア史的な研究に対しても、社会史的立場から新たな理論的貢献を加えるものである。また、非常に丁寧かつ丹念な資料調査の積み重ねの中で執筆された個別章の完成度の高さも審査員によって高く評価されることになった。

よって、本研究は、博士（教育学）の学位を授与するに相応しいものと判断された。